

この一冊

人口が減少するのは日本だけではない。経済や情報や技術革新などのスローダウン(減速)は日本以外にも起こる。著者は今回のパンデミックでなく、2020年以前に各種のスローダウンが世界で始まっていたと考える。

トマ・ピケティは『21世紀の資本』で、経済成長がスローダウンする現実を指摘して世の中を驚かせた。しかし、著者ドリングに言わせると、現代人は「すべては加速している」という「呪い」にかけられている。世界は大きいことを良いこと

Slowdown 減速する素晴らしい世界

ダニー・ドリング著



原題=SLOWDOWN (遠藤真美訳、東洋経済新報社・3080円)

▼著者は地理学者、英オックスフォード大学教授。デジタル世界地図サイト「ワールドマッパー」共同開設者。

日本は安定した「未来社会」か

だと思いきも加速の国アメリカに追随し、必要のない品物を買入込み、余計な武器の技術刷新にとらわれてきた。日本は世界の大国で最初にスローダウンした事例であり、世界で最も平等

だと思いきも加速の国アメリカに追随し、必要のない品物を買入込み、余計な武器の技術刷新にとらわれてきた。日本は世界の大国で最初にスローダウンした事例であり、世界で最も平等

価格差が解消されてしまった。これこそ世界が日本から学ぶべき長所だというのがだ。ふくらんできた東京の人口もスローダウンつまり安定に向かっている。人口増加地域が中心部か、郊外か、準郊外かの問いはまもなく問題にもならなくなる。東京や日本はこれまで急速に変化を遂げてきた。これからは、人口と並んで建物の数や消費全般の変化が終わりを迎える事例となる。他方、文化や知性

は従来にもまして速く変化すると、著者は予測する。確かに日本は、物事が変化せずに収縮し、高齢化した人口から利益を挙げづらい未来社会を先取りしている所がある。東京

のようにメトロやJR線が発達している都市の若者たちはもはや自動車を買わない。高齢者たちは、よほどに食欲か商売でもなければ、黄金も真珠も欲しくないだろう。

とはいえ、著者の議論にはどこか厭世的な倦怠感がある。スローダウンの時代になれば、互いを気遣うようになり、将来の見返りを求めないと主張する著者は、日本の世代間対立つまり将来にも負担を強いられる若者による高齢者への反発をまったく理解しない。果たして著者は、引退後も給付に恵まれた老人への、若者の鋭い視線を知らぬげに、どこかの海辺で砂の城を悠々と作るのであるのか。

《評》富士通フューチャースタディーズ・センター特別顧問 山内 昌之